

がみられる。「前と同じくらいで
きた」まで含めるとかなりの高ま
りといえる。

しかし、長い間継続することは
マンネリ化し、効果が薄れると考
えられる。

③ 共通理解を図るための援助指導

- ア 学年・学級の指導体制の確立
- イ 月1回の生徒指導協議会の充実

④ 「オアシス運動」展開への援助指
導 (省略)

⑤ 家庭・地域との連携 (省略)

(3) 研究の考察

① 教育目標に関する意識の変容

焦点化され
た教育目標具
現化の取り組
みが他の教育
目標に対する
児童、教師、
保護者の意識
の高まりに結びついたと考えられる。

ア. 調査対象3, 4, 5, 6年生児童100名抽出
3. 学級のめあてを言うことができますか

	7月	11月
言うことができる	13%	26%
だいたい言うことができる	56%	54%
言うことができない	31%	20%

イ. 調査対象教師22名
5. 教育目標具現化への取り組みの成果が
実感できますか

	7月	11月
実感できる	0%	0%
だいたい実感できる	89%	92%
実感できない	11%	8%

② 児童の変容

自己評価による達成状況、朝の元
気なあいさつの声の響き合いなどか
ら「あいさつ」については以前より
確かによくできるようになった。

③ 援助指導に関する考察

- ア 目指す児童像の具現化については、
思い切って焦点化し、児童、教師と
もに意識できるものにするのが効果
的である。
- イ 指導の場、方法、機会を明らかに

し、教師のかかわりを児童一人一人
の変容を認め励ますことを中心とし
て、一定期間指導したことは効果的
であった。

ウ 自己評価カードについては、発達
段階を考慮し、個に応じた指導をす
ることにより、めあてを意識させる
うで効果的であった。

エ 教育目標具現のためには、他領域
との連携、教頭の各場面での役割の
重要性について再確認できた。

6. 今後の課題

教育目標(思いやりのある子ども)の
具現化については、現在も実践研究中
であり、研究の成果として結論しがたいが、
今回の実践を通して言えることは、児童、
教師の教育目標に対する意識が変化して
きたことである。

- (1) 学校教育目標の見直しと、学年の具
体目標とその到達については、目標の
内容項目を焦点化し、常に、教師、児
童が意識できるものにする必要がある。
- (2) 焦点化された教育目標について、意
図的、計画的に指導ができるよう各領
域ごとに、その位置づけを明確にする
必要がある。
- (3) 教育目標具現化を目指し、学年・学
級経営の一層の充実を図る必要がある。
- (4) 思いやりのある子どもの具現化のた
め、その基本である「あいさつ運動」
については、創意工夫を加え、全校的
な実践を継続したい。さらに、家庭・
地域へと広げていきたい。